

大覚寺・大沢池（旧嵯峨院）の調査（5）

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

平安時代嵯峨院庭園の遺水であるSD43は、1986年度にその一部を検出して以来、1987年度に大沢池への注ぎ口を確認し、次第にその様相が明らかになりつつある。今年度は、SD43をより広い範囲にわたって検出することを目的に、上記の2調査区を結んで南北25m、東西15m、面積360㎡の調査区を設け、1988年8月1日～9月4日の期間に発掘調査を行った。調査の結果、SD43は平安時代以前の自然流路（SD95）を埋め、整地を行った後に開削していることを確認した。SD43は、幅約4～10m、深さ約1.0mの素掘り溝で、調査区北端で東南から西南方向へ、中央やや南寄りでさらに東南方向へ大きく蛇行する。埋土は3時期に分けられる。最下層は中央部が幅0.9～1.5mにわたって約40cm深く、底面には拳大の礫によってえぐられた無数の凹凸がある。この帯状の底部が埋まった後、厚さ約0.8mの黒色粘土層が溝全域に堆積し、溜状を呈していたことを示す。この堆積土中から、種子や枝葉などの植物遺体をはじめ、平安時代前期の土器片、瓦片、木簡、木製品などが出土した。土器には墨書土器が10数点含まれており、とりわけ「供御」と記す杯の破片は、嵯峨天皇に直接関係するものとして興味深い。木簡は21点出土し、「薬用所」、「御膳請飯」と記すものがあるなど嵯峨院に関連する役所や家政機関の一端に迫る貴重な成果を得た。SD43は、黒色粘土層が埋まる途上に杭やシガラミで護岸されていたらしく、随所に杭列の痕跡が認められる。また最上層の埋土からは、廃絶時期を示す10世紀の土器片が出土した。

（田中哲雄・本中 真）

調査区全景（南から）

大覚寺・大沢池第5次調査遺構図